

う
ね
り



SHIBUYA PUBLISHING BOOKSELLERS

鶴沢木綿子

荒波で知られるこの地のなかで、入り江になった風の扉という名の村の潮は、雪の降る前の北風の季節のほかは、ほとんどききとれないほど静かな満ち干きをくりかえした。その藍にちかい春の夜の海にはほの白く浮かぶほたるいか漁の船は、八朔はっさくの祭とならんでこの村の名物でもあった。子供たちは宵の飯を終えると塩と魚の生くささの漂う港にあつまって、陽炎のように暗闇に浮かんだ船を眺めては、夢の中にいるような、ぼやっとした不思議な気持ちにつつまれた。

春の解禁ののちの限られた季節の間、漁師の衆は、ぼんぼん漁火を焚いて、毎夜沖に出る。ぐっと口を結んだ若い輩の足もとで、へりを濡らす、こぶりこぶりという静かな波だけが響きを残し、船は浅瀬をすすんでいく。半時間かけてたどりついた仕掛場でやっと、男らは、堰をきったかのように、いきのいいのを願った、祭囃子と同じ勇まし

いかげ声を、網をひきひき、はじけとばす。

さあせいさあせいっ さあせいっ さあせいっ

さあせいっ さあせいっ さあせいっ

それは力をこめるたびにわんわん大きくなり、絶頂に至る夜中には悲痛な叫びにさえ変わる。

さああしえいっ しゃあああせっ さああしえっ

怒濤の音頭にあふれるなか、シエツという若頭の野太いひとひっぱりで、ぬるっとした妖艶な光をはなつ深海生物が溢れんばかりにあらわれる。甲板の上でぴっぴっと踊る獲物をひとしきり眺め、男たちは、まるで照りつける太陽のもとにいるかのように額に手をかざし、海の神に敬礼する。

*

村の言葉で「波」という名の若者は、冬の厳しいこの村での限られた春の間、たとえばどんなに強い雨がよこなぶっても、どれほど激しい風がふきすさんでも、毎夜、かならず沖にでた。

海岸沿いにつくられた杉の長椅子の暗がりでは泣き声をあげてから、波には血のつながった家族は一人もいなかった。通りがかりの男に救われてなかったら、流れついたガラクタとともに、砂に埋もれてしまっとなったかもしれないわ、とドウドウなる北風の音をきくたびに、波は思う。だから、波にとってその男は父であり、命をつないでくれた母でもあった。

波を拾い育てた「光」という名をもつ男は、今の波と同じくらいの齢にこの村にやってきた。この村で生まれ育ったほとんどは漁師か狩人になるが、光はもともと、灯り師として別の地からここにやってき

たから、この男もまた一人きりだった。光は、蒼と緑のこの村に間違つて落ちてしまった宇宙船みたいな白いコンクリートの建物のなか、昼夜絶えず電気をつくっては、自身の生まれた遠い都町に送りだしていた。村の者は蠟燭やぼんぼり雪洞の明かりのもとで夜を過ごしたし、冬の間は薪をくべて暖をとったから、光はよく、名前に似つかなくすんだ目をしては、俺のつくつとるんは、村の人の役に立たんどころか、やっかいなもんやからな、と弱弱しくこぼした。俺、と自分のことをいうのはこの村では光だけだった。波は、それでも、光が灯り師として懸命であることを知っていたし、自分には絶対できないであろうことをやる才覚をもった男のことを尊敬していた。

波が自分の生い立ちをきいたのは、十五歳の夏だった。この村の男児たちとならんであの船をみて育った娘が、自分は漁師になると心に

きめた頃だった。

この村では子が十五歳になる年の祭りの朝に、ちょっとした儀式をするようになっていた。大人たちは自分が若いころに身につけたのと同じ、輝く流星みたいな衣装をわが子に着せて、訊ねられることすべてに嘘偽りなく答えなくてはいけない。ひとしきりの話のあとで、子らは、はじめてこの村の透明な清酒を呑むことが許され、男児は男に、娘は女になる。

古木の縁側でまっすぐな太陽をうけながら、波にも女らしい姿をさせるべきかと、普段とかわらないりの娘を横に座らせて、じっと見ているが、光には、女らしい衣装というものも、娘らしい波というのも、思い描けなかった。波は波で、今は漁師という名を背負った法被を着ることのほうが、ずっと待ちどおしいと告げたかったがうまく声

がでなかった。

暫くの沈黙のあと、波のききたいことと俺のいつときたいことは一緒やろう、といって、光はすくっと波を向き、返事も待たずに、波が生まれて間もない赤ん坊の時分に海岸沿いの長い木椅子の下、紫色の衣に包まっておかれていて、この村に来てまもなくの光がほたるいか漁の見物の帰りに見つけ、村の全員に両親を探してもらったが何もわからず、拾い主の自分がやしなうことになった、などということをし、語り部の語る伽話のようにさらさらと話した。耳にはいる男の声を、霧雨の中で避けることなく水を受けたみたい、流れるままにしていた波はふと、紫は、ほたるいかに染めたんかもしれん、とあこがれのようなことを、思った。

うねり
レン、と、この村特有の語尾だけが飛び出して、あわてて、うちは

光がひろってくれてよかったとおもっとんレン、といいながら、こんな正直な言葉を光以外の男にかけることが、自分にはこの先あるのだろうか、と波は娘らしいことを考えた。波の言葉を、風の強い日に谷を隔てて届いた声をきくようにたっぷり時間をかけて汲みとった男は、ひくつと目を開いたかと思うとすぐに、溢れた汐水しおみずで濡れた臉を細長い指でぐいっと押さえた。嗚咽をもらすまいと声を抑えた反動で、肩が女みたいにかくかく揺れた。そのさまを隣で見つめながら、その目は、自分のよりずっと多くのもんを映したんやろうか、と波は、少しうやましく思ったりした。祭りの太鼓と鉦が、嘘ものみたいに遠くで響き、離れに留った蟬がそれを必死に追っかけていた。

ツインツイコドンドコ シイシイコドンドコ シインシインコドン
ドコ

波は、揺れた肩に手をのぼしてみて、沸騰した薬缶を触ったみたい
に、ふいっとちぢこめた。また、ツインツイコードコ シイシイ
と鳴り、それが届いたのか、光は、はと抑え込んだときと同じふうに
突然に背を伸ばし、いかんいかんと頭をふり、並んだ漆の猪口に透明
な酒を注ぎだした。とくとく、とくとくと、畳をつたって心地よい音
がふたりの体にはいり込んでいった。波に大きいほうの猪口を渡し、
光はこじんまりしたほうを、口をすぼめてぐいっと呑み、ありがとう、
と都くさいイントネーションでささめいた。そのときだけは、不思議
と、楽器も虫もしんと静まりかえっていた。

波は、女になるんか、と強い清酒の熱が喉を通るのを感じながら、
胸をきりきりさせ、米麴の甘い匂いと夏の日照りで、ひどく酔っ払っ
たせいやわ、とひとりごちた。

*

光は、ああ、まるで牢屋や、と毎朝、切り立った丘の上の白い建物のまわりをぐるりとまわっては、ふうっと長い息をはく。

川で命を絶った親のことも知らないうちから、あんたはみかけがいんだから勉学をおし、かしくさえなればあとは何でも手にはいるわ、と養護院の「母」にいわれ続けて本ばかり読み、十になるころには、光は、だいたいすべての成り立ちが説明できるようになった。中等学校にあがるときは、大学から頼まれた山ほどの研究資料をかかえて校門をくぐった。十五の時に、それまで顔もみたことない、薄く何本か生えのこった髪を横になでつけた黒服の男が学校にやってきて、ちょっと部屋へ、と光を呼んだ。校長室の客用の立派な革ばりの椅子にでんっと座り、君の力をここでくすぶらせるのは、もったいないと

思わんかね、と文言を述べた。うんうん、と自分より賢い生徒は手に負えないと前々からくすぶっていた校長は、大人げない態度で何度もうなずいた。君の物理的研究の才能はうんぬん、卒業後の仕事として新しい方法での電気を生み出す仕事をまかせたい、などとひと通り光へ頼みごとをいってから、毛をなでつけた男は、

「へんぴなとこみたいだがね、いいとこさ、きつと。いや、いろんな意見があるかもしれんがね、あのやり方で灯りを生み出すのは、とても必要なことなんだよ。すごいパワーだ、素晴らしい。君はあそこで君の家族や、おっと家族はいなかったか。まあ、その方が良いだろう。んんん、ともかく、友人や知人、世の中の素晴らしい才能を持った人たち、そのほか、光を、だね、必要としている人たちに、とてつもなく貢献できるんだよ、役に立つ。素晴らしい」

と、はげましても、いいくるめともとれることを、一気にいった。光を、というところを強くしたのは、冗談も込めていたのかもしれない。

ぷんぷん匂う巻き煙草の香にむせかえりそうで、光はそそくさと頭を垂れて、その便所みたいに冷たい部屋をあとにした。家族のいない光が僻地にはたらきにいくことになるのは仕様のないことで、才をもった者として認められていることも、まあ、ありがたく、この都だっけとくべつ気にいってゐるわけじゃない、とひとりごちながら、村に向かう日に一度の路面電車に乗った。月が蒼く天上に輝いて、湖の底みたいな色の浜辺に降り立つと、夢をみているのかもしれないと思ったりもした。

村にきて数ヶ月たち、ひとりて暮らすには大きすぎる茅葺きの家で

若い衝動をくすぶりながら、支度を整え、光は、白い建物とこの村の酒場に通うようになった。あんた、ゲンシの人かいね、と歪んだ顔をむけるじじやばもいたが、あんたみたい若いもんがふえるっちゅうのは、ええこっちゃね、と漁師たちは、春の空みたいな透き通った顔の若者を迎え入れた。今まで呑んだことのない強い酒にくらくらしながら、ほたるいか漁のことをきいたのも村に唯一ある酒場であった。

あんたの力借りんでも漁火は村を照らすんや、と口の端をくつとあげて笑う髪の黒々した女に、光は、なにかがはじける音をきいた。夜半に目が覚めて、誰かに強く会いたいと思ったのは、このときがはじめてではなかったか。その時は決まって、月が白く満ちて、波の音がやかましく響いていた。

光がここにきて一年が経とうとしていたころ、ほたるいかの女は漁

師の男とともに村を出て行った。光は女が消えてしまってから、はじめて夜道をとくとくと港にいった。ぼんぼん光る漁火は、自分が今までみてきたどんな灯りよりも暖かく、たくましかった。波をひろった帰り道、あの女が、波の母親なのかもしれない、と思ったりした。

一人の男が背負うには大きすぎる力のもとで、なにかがおこったら真っ先に逃げようときめていた。今は、波の顔を浮かべるたび、護るべきものができたことを、痛いと思う。

*

波は大人の儀式のあくる年の春、村の漁師のもとに願って海にでた。女になんかできるかいや、という男らの中で、若頭は、堂々と波をうけいれた。沖にぼつんと浮いた船の上、月が満ちるごとにかさを増し、とろみをもっていく潮の、こぶりこぶりという音をききながら、これ

は大きな女の宮の中なんかもしれん、と波は考えた。

*

商人がはじめてこの村にやってきたのは、波が何度目かの解禁を終え、祭りを幾日かあとに控えた朝だった。

ほたるいか漁が行われない夏の間は、小舟で銀魚を釣って過ごすが、その日はもったりと油臭い風が吹いていて、今日はいけんわ、と、波は、匂いにくらくらしながら呟いた。祭りの間だけはずっと家にいる光に、魚とれんがんやったら頼むわ、といわれて、ぴよこと玄関を駆けだしながら、うち、犬みたいや、と波は自分を笑い、それでも油臭いのを忘れて、軽々しい足で港に向かった。市場は、見慣れた顔の客たちでいつも以上にがやがやと活気があり、そこかしこで祭唄をくちずさむのがきこえていた。野菜売りのババは路肩に腰掛けて、つるつ

る顔した娘に声かけし、嬢っちゃんカラスノエンドウやってやるか、と野草で笛をつくってやっていた。種をむしりとった皺しわの親指の爪は真緑で、そこらの青虫を握りつぶしたみたいだった。ポーっというババの貫禄に、嬢はずっと高いぺいぺい音でこたえ、ポー　ぺい　ぺい　ポー　ぺい　ぺい　と漂う祭囃子に色を添えた。

ポー　ぺい　ぺい　ポー　ぺい　ぺい　あら　いやさかさあ　いやさかさとお

魚屋の女主人は、はじめたばかりの踊りに夢中になっていて、初子でせり出した腹を気にもせず、狭い軒先をぐるぐる回っていた。伸ばした赤い腕で、吊るした干物がぶらぶら揺れた。あら、波嬢ちゃん、トッサマと一緒にじゃないんかいね、と、自分も揺れたまま、墨でかいた眉をきゅっと下げ、幼子みたいに口をとがらせていった。茹でた蛸

みたいな肌色の女主を、波は、光はこの女に色気感じるんかな、と、ひとしきりながめた。

光は、波が今までに見たどんなものよりも美しい容貌をしている。波は、女でさえかなう人おらんのじゃない、とまっすぐに差した朝日を浴びた、起きたての白い顔の男を見る度に思った。村の女はだいたい、光が通ると、すっと頬紅をさしたようになったし、光と話をするのに、とろんとした眼差しを向けた。

青い魚をふたつ紙に包み、トッサマに良いのだしてあげんとね、と重ねていいながら銭をもらうのに突き出した若女主人の手は、吸盤みたいにべっとりしていた。

酒屋で、いっちゃん高いやつ、と選んだ瓶をうけとっていると、朝からの油臭いのが強まり、波はまた、くらくらとした。風上に首をのぼ

してみると、知らぬ顔の荷車を曳いた男が、ぎいぎいカラン とでたらめな調子で、海に沿った一本道をこちらに向かつてすすんでいた。ああ、あれやわ、と波が遠めでわかるほどに髪をべっとりさせたその男は、本纏子の黒着物に、黄金の漆をつっかけて、カランカランと小気味よくあるが、あれま、ほんにのっぺらぼうっておるんやね、と酒屋の旦那がいうように、顔はつるんとして、なんの際立ちもなかった男のなりとは反対に、大きな瓶をいくつもごろごろと積んだ、干した大根みたいな色の車は、所所がはげて、車輪が廻るたび、ぎいぎいと重たくくもった音を響かせた。

ぎいぎいカランカラン　ぎいカラン

野菜売りのババと娘に、あんたさんがた、ちょっと道をたずねたい、と村の者らの吸いつく視線もまったく気づかないふうに、のっぺら顔

は、鼻につく甲高い声をとぼして、いった。ここいらに宿かなんかありませんかねえ、しばらくここで売物をしたいんでしてな、と、どこかの訛りとも判らない変なイントネーションで問い、ババの弁がききとれなかったのか、あれ、おや、と首をひよこひよこかしげては、油臭さをふり撒いた。あれまいかん、と鯛みたいにぴちぴち動く、客人好きの魚屋の主が、そんならお連れしますと手をのぼして宿屋へ車を曳くの hands を貸したのに、すみませんねえ、と頭をさげた男の顔を見ても、表情らしい表情は汲みとれなかった。

あくる日の朝、のっぺら男は市場の片隅に店をかまえ、荷車の前にならべた木椅子に、カランカランとぶらつき足で腰かけていた。他所のものな、変なんもおるよ、と自分の知らないことをいう光にまた少し嫉妬のようなのを感じ、波は、路肩でじいっとこれを見つめていた。

市場が賑わいはじめた午下り、男は扇子でココンツと台を叩き、慣れた早口で宣伝をしはじめる。

「まあまっみなさん。ごきげんうるわしゅうございます。わたくしは、都からやってきましたあきんどでえ、ございます。ココンツ されど、しかしです。衣類や酒、瓶やら宝石、そんなものなんざあ、売りつけやいたしません。わたくしめは、これ、世にもめずらしい、情報商人なのでございます。遠いとおい国のこと、大きいことから小さいこと、あなたがたの知りたいことなんでも教えてしんぜましょう」

なんやなんやと、村の者らが集まりだし、男はいっそう調子をあげて、ココンツとやる。

「これは占術なんかじゃあ、ありやいたせん。都で仕入れた正真正銘、たしかな話でございます。さあさあ、不思議にかんじておられること

を、どんとどんと、たずねてこられたら、これよろしい、ココ
ンッ」

最初に食いついたのは、さきの魚屋の女主だった。こんな事でいいかわからんげんけども、この舞について知りたいんやわ、と、首に巻いた薄い衣をなびかせ、赤い手を伸ばしてゆらゆらぐると踊ってみせる。あらあらずばらしい、ココンッ とのっぺら商人は女主人の舞に扇子を叩いて歓声を贈り、しかし、ええ、ええ、ええ、少しだけ、本来のものとなつておりますかもしれぬ、などといい、ではでは本場の舞をご覧にいきましょう、と腕を広げ、ぴよいと体を横にずらした。商人の退いた荷車の前、どこにいたのやら、奇術のように、見慣れない女がふいっと現れた。紫の着物からぐいっと頭を引っ張ってつけたみたいに首が長く、桃割れからニョロッと毛がたれるうなじは、ほたる

いかみたいにぬるっとしていた。波は、自分の母はもしかしたらこの女なのかもしれないと妙なことを思った。

「さあさ、はじめてのご依頼ですから、こればかりは只で用立てさせましょう。お代はいただきます。みなさまとくと、とくと、お楽しみくださいませいっ」

男がそう声を張ったのを合図に、女は長い首をさらに伸ばし、ふんふんふん、と娘のように鼻をならしながら腕を広げて舞いだした。右手、左手、右あし、右手、鼻歌に合わせてくるくる回り、こちらに向いているのが右なのか左なのか、どちらがどちらか判らない。十の細長い指はまるでそれぞれが意思のある小人みたいに踊り狂い、着物からはみでた腕やら脚は、骨がないかのように、くねくねくねっと巧みに動き、本物の烏賊のように思われる。誰もがあっと口を紡ぎ、女

の、鼻歌だけがいやらしく市場に響いていった。

広げた手を、歌とともにススッとすぼませ、腹の前で合わせた女が、甘い砂糖をなめたみたいに唇をくいと持ちあげると、まわりは、あんな踊り見たことないで、とすっかりほかんと口をあけ、感嘆とも安堵ともとれる息をもらした。

「さあさあ、みなさん、これはほんのひとかけらにすぎません。わたくしたちは多種多様、色とりどりの新しい発見をお授けえ、いたします。どうぞどうぞいらしてください」

男の言葉を皮切りに、くんくん鼻をならした者らが長い列をつくりはじめた。紫女はにまりと笑い、乱れた着物を直していた。

「さてさてここからは対一のお付き合いです。どうかゆっくりおまちくださいませ。おまちの間に知りたいことをこの紙にお書きください。」

おたくさんやおたくさん、それぞれの方がききたいこと、こそつと教えてしんぜましょう」

と、相変わらず気色のないまま商人は叫び、次の客である魚屋の主を椅子に座らせた。紙面の尋ね事をフムと読み、耳のあたりでこそこそ話をすると、へえ、へえ、そうなんか、こりゃ大変や、そうかそうか、そういうことなんか、と魚屋の主はひどく感激し、礼の金を渡してぴよこぴよここと店に駆けていく。期待を膨らませた行列は、そわそわ落ち着かず、腹をすかせた蛇のようにぐねぐね波うっていた。

*

八朔祭の慣わしは、村の浜に立てかけられている、松風に晒され穴あきになった看板で知ることができる。

「昔、男神が村の浦に流れ着、海の神社の女神と夫婦になりました

しかしだんだん男はこの浦の荒波が怖くなり、里の神社に移した。以来、八月朔日に、海神社の女神の元へ、男神の輿を、多くのお供を引き、賑々しく運ぶのです」

祭事は、お旅と本祭りの二日にかけて執り行われ、この間は、村のほとんど誰もが眠らない。お旅の朝は、まだ風のぬるいうちから、蔵に眠っていた十をこえる黄金の神輿がしゃんしゃん揺り起こされ、御神灯のキリコがよきつと立てられる。嫁らはご馳走と清酒をたんまり用意して軒先を開けはなち、日にひとつしかない路面電車も、年分はたらくかのように、ひっきりなしに見物客を吐きだしていく。太陽が真上にあがる時分には、男も女も、娘も輩も、子に、じじばばさえもが、ねじりを巻き、赤に緑に藍に蒼、臙脂に橙、墨に白、色とりどりの法被を召しこんで、しえっしえと神輿をキリコを、担ぎ出す。だれ

もかれもが、ごくりごくりと清酒をあおぎ、太鼓と鉦が、ツインツイコドンドコとそこらを祝いの気色に染めていく。

波は漁師の藍をまとい、光はいつもどおり白を着て、男神を迎えにいくのに田畑をうねうねと練り歩く列にあわさり、肩を入れた。背に太鼓の紋のはいった白衣は、認められた打ち手だけが着ることの許される、数少ない法被だ。海草と樹皮でこしらえた鬼の面をかぶり、太鼓で敵に夜襲をかけて郷土を守ったこの村の祖の伝えをきいてから、光は、和太鼓の名打ちになった。

かっと差す陽光をあびて、誰彼たらたらしょっぱい水を垂れ流し、旅路はじりじり湿っていた。触れ合う者からブアと噴出す、塩混じりの熱気を受けて、波は、守られているような心地よさを感じた。

森で男神を乗せ、海の女宮へ歩を向けるころには、とんと日は落ち、

一行の灯りは、巨大な漁火のようにぼうぼう、あたりを照らす。行列は、とどまることなく囃子を唄い、祝いのさあせいっをくりかえし、いったりきたり、もったいぶって海へむかう。ようやく辿りついた女神の待つ鳥居の前、光は、腕を高く構え、打ち手の代表として、ただだだだどと厳かに和太鼓を轟かせる。それは逢瀬の始まりの合図であり、祭りの絶頂を示すものだ。息をのんでいた衆が、太鼓を皮切りにいっせいに押しあい突きあい境内にはいり込み、狂喜の乱舞の幕があがる。多彩の法被がぐるりぐるり神域を巡って円を描き、さあせいっさあせいっ、あちらこちらで声が飛ぶ。持ち上げられた神輿の上、大鳥は、がくんがくんと揺さぶられ、幾重もの蕨手が、しゃんしゃんしゃんと、からみあう。薄衣の鉦たたきは、天狗みたいにぴよぴよこ跳び、かんかんかんっと宴を煽る。男も女もおしあいへしあい、ぶ

つかりあい、砂がもうもうあがっていく。

さあせいっ さあせいっ どどっどんっ

しゃんかんかんかん さあせい さあせい

混み合う見物客のなか、魚屋の女主人は憑かれたように踊り、な
らったのか、酔ったのか、くるくるとずいぶん軽やかに廻っていた。

隣でぴちぴち跳ねながら鉦をうつ主の透き通った衣と、一体になっ
ているようでもあった。隅のほうでは、巻き煙草をふかしながら水平線
を眺めるように光を見つめる紫女と、若衆からの酒のすすめを、いえ
いえわたくしめは、吞めませんから、と断る商人が見えた。手だけが
表情豊かにゆれていた。

散りばめられた星にむかってかつ担ね棒を握る汗だくの手をのば
しながら、波は、本殿を照らす灯りが激しくゆれるさまに食い入り、

酔った頭で、船の上におるみたいやわ、とうっとりした。血がとくとくと騒ぐのを感じながら、陣に男神のはいっていくのをぐいぐい後押しするように、女衆のかしらをとっては、氣にいりの囃子を、くりかえし掛けあつた。

磯はアー 荒磯 オ あらきイイのオ まアアアアつウは

ふらつく脚で、波がうたい、

あら いやさかさあつ いやさかさつさとお

女らが星のように飾りを添え、

沖のお オ 漁師のオ

神輿の衆らは、武士のように力強く、

ええー たちすがアた

光の澄んだ声は、夜空を透かしたみたいに、のびていった。

そつあ たアアアちイイ すがアたつ

あら べっべえしえゝ べえゝべしえつと

神の急く気持ちちを代弁するように、色とりどりの音がまぎって交じって、空が白む まで、なんどもなんども、高らかに飛んでいった。

*

本祭りの朝は、誰もが眠れないであろうに、逢瀬の邪魔をしないためか、村は静かにぼんやりしていた。浅瀬の底みたいな水色の靄のなか、波は、酔い覚ましにと草履をつっかけた。遠くで、子供らの唄う、囃子がきこえていた。

たかいいゝ やまかあらあ

茅葺の母屋から浜に抜ける一本道に出ると、変や、と、波は、海の遠瀬のあたりが、ぐらぐらに煮えているのを見た。藍が渦巻いてまだ

らににぎり、脈々と太い筋がうごめいて、今にも噴出しそうに沸き立っているようだ。波は頭がぐわんぐわんと揺さぶられるような心地がした。

たあにぞおこおこ　みいいいれえぼつ

変や、と、声にだそうとしたところで、ずんつと腹にせまる音が土を通り抜け、ギャアアと市場あたりから、つんざく声が響いた。と思うと、それは、ウ、ウ、と低い嗚咽になって、ドウシタドウシタ、イッタイドウシタと、という焦ったのが追って風にのり、盛りを迎えた祭囃子と重なった。

ドウシタドウシタ　あらいやさかさあ

ドウシタドウシタ　いやさかさつさと

港にできた人溜りの真ん中に、藁人形みたいのに、脚がぐにやりと折

れ曲がって横たわっているのがあった。遠めからでも明らかな、赤い肌とぼてつとせりだした腹で、魚屋の女主人や、と、波は思った。耳のあたりから流れた血の溜まりの中で、ぴくっぴくっ、と、まるで陸に揚げられた魚みたいに跳ね、それにあわせて、白い巻物がひらっぴらっとなびいていた。ウ、ウと崩れる主人の横で、あっこから飛んだんかね、とまるで乗り物のことをいうみたいな誰かの声が空気のかたまりみたいに残った。

*

女主人がお旅の宵、だまされていただけの、毒まみれだのと、ひとしきり叫び、この子うんだらいかんのやろ、と狂ったような目をしていた、と、波と光がきいたのは、夜の宴に備えゆったりした、朝の神社でだった。あの女になんやいわれたんやろうに、とカラスノエンドウ

のババは、紫女を見つめながら呟いた。いつのまにそんなふうになつたかは知らないが、華麗な踊り手で客人の紫女に、腹ぼてで担ぎに出られない祭好きの女主が親しみをもった、というのは、ありえる話だった。

商人とその女は、まだ人がまばらな女宮の祠のあたりで、荷車を曳いて村を去る支度をしていた。神さんにあいさつしないとねえ、と寄ってきた魚主人に応えながら、誰の耳にも届く、やたら大きい声で話していた。

「いやあ、わたしらはね、あのやり方を嫌悪しているですよ、それでね、こんないい村に、あんなにつくって、ってね、ほら、ちゃんとこの目でみないと、この村のよさとか、伝えられんでしょう。わたしらも体はって、やってるんですよって、都でいってやろうとね。そ

んでまあ、あっちでの商いとおんなじなりで、きたんですわ。村の人にはねえ、もう生まれたときからここにおられる方にいまさらいうのも気の毒でねえ、きかれない限り黙っておこうかって、ふたりで話してたんです。漁師さんだっておられるし、あれが、ひどい毒を海にたれ流しているなんて、そんなこといえませんしねえ。けどねえ、魚屋の奥さんがあの建物について知りたいっておっしゃって、そんでお子がお腹におられるもんだからね、おしえてあげんわけにいかなかったんです。こんなことになってしまいましたから、村の人には伝えておこうとおもいまして、ここに来てみたんですけどねえ、祭りに差し支えるようですから、大々的にはいいませんけどねえ。まあねえ、わたしらはただ、そうであるかもしれないということをつたまでですからね、そう信じなざるかは、皆さんしだいなんですけどねえ」

ちらちらとこちらを探るような魚屋主人の眼から、のっぺら顔が、灯り師の仕事のことをいっているは、波にもよくわかった。光がよくいう、やっかいもの、というのを商人は云いたかったのかもしれない。たとと積んでいた売物でない瓶も、必死に酒を断っていたのも、この村のものを口に入れないわけだった。そこらにいた人らに、商人の聲が耳にはいらぬわけがなく、あんさまあれ本当なん、と光に尋ねる者がおり、うそな、住んどるもんないちばんわかつとるんに、と支度にもどるのがちょっと、なんだか危ない村だ、すぐ逃げなくては、と帰っていく見物客がちょっといた。小さい村で、この手の話がもちきりにならないはずはなく、祭りの最中でよかつたんかもしれん、と波は光の顔を見つめたが、二つ並んだ目は、枯れた大木にあいた穴みたいに、闇でしかなく、そこには何も映っていなかった。また、ぐわん

ぐわんと頭が浮き、光のことを好いと思ったから飛んだんかもしれんわと、波は、女主人の気持ちがあつたみたいなきことを考えたりした。

命は大丈夫やつたんやし、祭り好きやさけえ、なくなつたらよけい悲しむわ、と妻のことをいう魚屋の声があり、本祭は例にならつてはじめられた。キリコを背負い、海の神社をあとしながら、波は、商人と紫女がそそくさと、来た時と同じ一本道に向かうのを眺めた。男の顔には相変わらず何の表情も浮かんでいなかった。空は女の着物みたいな色をしていた。

ぼんやり赤みを残したまま、太陽が海にとっぷり消える時分、男神が帰りついた森の境内では、お旅の夜を凌ぐほどに、鉦や太鼓がけたたましく鳴り高まっていた。汗と酒の臭気を含んだむわつとした熱風を巻き起こし、神輿もキリコも、また一人きりになってしまふ切ない

神のために、乱れ舞った。

かっかっ どどどどん かっかんっ どどどんっ

しゃっしゃんっ さあせいっ しゃっしゃんっ さあせいっ

波のぐわんぐわんという頭の揺れも、祭りの絶頂に近づくとつれ、烈しさを増していった。

かんかん どどどん かんかん どどどんっ ぐわん ぐわん

さああしえいっ ぐわん ぐわん さあしえいっ

ずずずズーーンッ

とつぜん、地が引き裂かれたような轟きがあり、ぐわーんぐわーんと酷い眩暈のような震えが祭りを覆っていった。波は一体になった頭の揺れと大地の揺れに、山のほうに飛ばされたが、たいていの担ぎ手は何が起こっているか気づかないまま、しゃんしゃんと鳴る神具に

つぶされていった。ひらけた場へと駆けていく者や、近くの者と抱き合ひ、へなへなと腰をおるのがあり、鉦打ちは脚を動かすたびに、かんかんかんつと火消しみたいな音を響かせていた。雪洞は、ぐしゃつという音だけを残して、火の塊になった。地面はもう一度、がくがくつ　がくつ　と縦に揺れ、跳んだ太鼓が、砂埃をあげて転がっていった。ドドドツと宮の瓦の落ちる音がし、きゃあ　うわああと、満月の動物園のような雄叫びが、背後の森にこだましていた。

大きな揺れはそれだけだったが、誰もが探るように潜まって、祭囃子は遠い夢のように忘れ去られていた。ぐわんぐわん、と波はまだ揺れているのが自分なのか大地なのかわからないまま、思い出したように、海や、と呟いた。誰かが、津波やーっ高いところ逃げやーとよく通る声で叫んでいた。機械みたいに足を動かしながら、波は、崩れた社

殿の下で動くものを見たような気がしたが、それが人なのか、砂埃なのか、わからなかった。煙の上がってきた細い山道を前後の村人とからまりながらすすんでいると、波は、肩をくいっとつかまれ振りかえった。光が、よかったわ生きとって、と満ちた月のように白い顔に安堵の息をはいていた。波は急に目に水があがってくるのを抑えられず、ぼとぼと泣なみだを垂らしながら、光の細い手をにぎりしめ、むせるような香の杉林のなか、山の頂へと歩をふみしめた。そこかしこに落ちた提灯の火が、ぼあぼあっと、麓を明るく照らしていた。

頂上から臨んだ夏夜の海は、ぐつぐつとぐらついて、朝に見た太い水脈がいくつも折り重なって巨大な壁になり、這いつくばって、静かに暮らしの地にせまっていた。それは、この村の者らが見たどんなものよりも、おそろしい生物だった。船も建物も、残された村人や潰れ

た骸も、その前にひれ伏すしかないように飲み込まれ、藍の色はみるみる黒々としていった。シィシィと鳴く蝉と、ごごごごごと這う水だけが、生きているものの証として音を残していった。ああっ女房がと、とつぜん魚屋の主が誰にともなく叫び、何人かの娘が細い鳴咽をもらしていた。それ以外は、声を出すことを忘れたまま、がたがた膝をおっていった。

何もかもがぼんやりした蒼に染められる明けのころ、潮は来た時と同じようにもったりと去っていった。水音が遠のき、相変わらず蝉だけがシィシィと、夏の朝を告げていた。波は、海沿いの道のあったあたり、曳き車がぶかぶか浮かんでいるのを見つけた。目を凝らしてみたが、商人らは見あたらなかった。市場はまだ半分ほど水に浸かっ
ていて、長い杉椅子は、ぐたぐたした木屑になりかわったようだった。

漁船は、祭りの旅路まで乗り上げていた。

遮るものがないままの青白い陽が真っ直ぐ差してくると、並んでこの地獄絵図を眺めていた光は、俺、いかならんわ、と乾いた枝が折れるような声でつぶやいた。また、返事も待たずに、骨ばった指で波の手を包み、だいじょうぶや、といい、羽根のはえた生き物みたいに白い法被をたなびかせながら、はたはたと飛んでいった。

まだ波の頭は、ぐわんぐわんと揺れ続けていた。

*

やっぱり牢屋やったか、と大きく輝ひびのはいった白い建物のもとで、これを見上げる人も最後やな、と光は思い、悲しい祭歌をきいたような心地がしてあたりを見回した。そこにはただ、倒れた樹木が幾重にも重なって、藻が、枝や葉に髪かみの毛みたいにからまりついたのである

だけだった。ずっしりした扉を押し開けたとたん、砂漠に吹くような風が光をくるめた。一瞬にして、汐がブァッと噴出すのを感じながら、光は、ほたるいかの女の顔を思い出そうとしたが、どうしても浮かんでこなかった。内では、ひび割れたコンクリートから染み出した塩水に侵された装置が、ブォッブォッと蒸気を吐き出し、灯りの産みの親である炉は、ぐつぐつと、近寄るだけでただ爛れ^{ただ}そうなほど煮えたりぎっていた。

生贄は俺だけでじゅうぶんやろ、と光は誰にもなく語りかけ、波を想った。俺は、娘に、あのほたるいかの女に感じたようなことを思ったりはしなかっただろうか。また、遠くで祭囃子の哀しい音がなっている気がして、光は、汗で色の変わった白法被のうえ、ぐいと胸をつかんでみた。

*

潮が引いた瓦礫を、村の者らはぼんやりと眺めていた。何度日が昇り、沈んでも、時間がとまったみたい、みな凹凸のない顔で遠くをみているだけだった。村のあらゆる場所に祭りの彩りの残骸が、玩具のように転がっていた。だれも、神輿やキリコのことにはふれようとはしなかった。別れるんがほんとうにいややったんやね、とぼつりというのだけが、秋の桜みたいに場違いに、たゆたい消えていった。波は、何人かについて山をおりた。海の近くにいきたかった。光が行ってしまってから、三度、月をながめたが、頭の震えは沈まらなかった。高く茂った杉林の小道ではミンミンミンミンと、この村の短い夏の終わりを惜しむように、蝉が声を振り絞っていた。頂を振りかえった波の目には、残った者の点々とした法被の色々だけが、鮮やかに映った。

村であつた場所は、家屋や土地ではない、なにかもつと大切なものを無くしたみたいに、がらんどろの集りになつていた。ひっそりとし、持ちこたえていた柱が風で倒れていく、めりめりつというのが偶たまにきこえる以外は、なんの物音もしなかつた。

波は、そうしたいから、ではなく、そうするしかない、といったふううに脚を動かし、屑物になつた村の上をびよいびよいと、港まで跳んだ。そこに、ひたひたの水辺に乗り上げたほたるいか漁船があつた。甲板はぼこぼこに穴があき、底には水が溢れ、足をかけると、こぶりこぶりと溜りが揺れた。じりじり肌を焼く真っ白い光を受けながら、ぬるまった潮に足を浸し、波は、崩れかけた船首に横たわつた。瞼をとじて、すうつと息を吸うと、濃い磯の香りがはいり込み、瞼の裏が青く染まつた心地がした。こぶり、こぶりと小さく響く水面は、や

わらかく波のつま先を、ざざざざざざと寄せては返す大きな動きは、ゆったりと波ぜんたいを、つつんでいった。

青に染まった世界のなかで、魚屋の女主人が、踊るようにひらひらと流れていた。水を含んだ赤い肌は、ブヨブヨとして、蛸よりもずっと生なましかったが、青に赤が映えて、美しくさえあった。その隣に浮かんでいたのは、商人の手だった。ゆらゆらと、なにかを探しているようでもあり、なにも求めていないようでもあった。紫女はうなじをこちらに向け、にまりと笑っていた。紫の着物は湿って、さらにはたるいかつぽく泳いでいた。遠くで囃子が響き、淡々とした満ち干きに、彩を添えていた。

こぶり　こぶり　ぢぢぢ　ぢぢぢ　あらいやさかさあ　いやさか
さつさと

ここにおったか、という光のなつかしい声がした。ほんの何日かだが、波には、ずっと昔にきいた潮の音のように感じられた。その声で光は、だいじょうぶやから、村の人に伝えてほしいんやといった。そして、まだやらなんことあるから、とまた、白く輝く月みたいな笑いをした。もわっとした夏の夜の空気のなかで、光の白い法被は、みたま御霊みたいに浮かびあがっていた。波はいやな心地がして、うちもいくわ、と手をのばしたが、あぶないからでんとき、と制され、魚とってみんなにあげんないかんやろ、触ってあげれんで、ごめんな、と、さぎ波みたいに規則正しいいい方でいった。ごめんな、と、船の揺れがあわさって、すっと響いて去っていった。

はっと、体を起きあがらせると、波のうえ、満ちた月が、落し物みたいにまんまると輝いていた。あたりには誰もおらず、光の、だい

じょうぶやから、という声をくりかえしてみようとしたが、波の耳には何の音も残らなかった。

*

光が見つかったのは、ほたるいかの網の上だった。大きな石をつけて飛び込んだのが、流れ、網にひっかかったらしかった。仕掛けが流されていかないかと見に行った若頭が、ひきあげた。白い布が水に透けてゆれとってな、ほんに、でかい烏賊やおもったわ、と褐色の眉間に皺をよせ、男はいった。

光は、もうずっと前から、この潮につつまれたかったんかもしれん、と波は思う。額に小さな穴が開いただけの美しい顔は、笑っていたくらいだった。

波は、生くささの残る船に寝ころんで、盛りの過ぎた夏の夜空を見

上げてみる。月も星も見えなかった。底の溜まりは少しも揺れず、瞼のうらは、墨みたいに真っ黒に染まったままだった。

男神が光で、女神がうち、そう囁いた声は、寄せて返す波にかき消され、灯りの消えた闇のなかでは、ざざっ ざざっ という潮の満ち干きだけが、静かに響いていた。

SPBS 作家・ライター養成塾

第一回文章コンペティション

文芸部門優秀賞受賞作

本書は応募いただいた本文から一切手を加えておりません

うねり Kindle版

二〇二一年六月二日発行

著者 鶴沢木綿子

発行者 福井盛太

発行所 SHIBUYA PUBLISHING

東京都渋谷区神山町一七―三テラス神山一階

郵便番号 一五〇―〇〇四七

電話 (〇三) 五四六五―〇五七七



(本書はKindleを縦向きにしてお読みいただくために
最適な文字組をしています)